沼津市明治史料館通信
二〇二〇年十月
通巻143号

■シリーズ沼津兵学校とその人材103
孫文と会った加藤定吉
■江原素六とその周辺58
江原素六と東照宮三百年記念事業
■史料館イベント報告
■国勢調査の先唱者 杉亨二 胸像特別公開

孫文・戴天仇以下中国人５人と横須賀海軍工廠長加藤定吉以下13名
（当館所蔵）

大正２年（1913）３月７日撮影。前列左から３人目が加藤定吉、４人目が孫文。（次頁に詳細を掲載）

シリーズ　沼津兵学校とその人材　103

孫文と会った加藤定吉

旧幕臣・沼津兵学校附属小学校出身で後に海軍大将になった加藤定吉（一八六一～一九二七）が残したアルバムの中に、中国革命の父・孫文（一八六六～一九二五）といっしょに写った集合写真が一枚貼られている（当館所蔵・加藤定吉関係資料48－34）。これは大正二年（一九一三）三月七日、来日中の孫文が横須賀海軍工廠を視察した際に撮影されたものである。当時、加藤は海軍中将で、前年一二月から横須賀海軍工廠長の任にあった。

亡命を含め孫文はたびたび日本を訪れたが、この時の来日は辛亥革命によって成立した中華民国の全国鉄路督弁（鉄道大臣）としての公式訪問であった。二月一三日長崎に着、三月二四日に長崎港から帰国の途に就くまで、東京・横浜・名古屋・神戸・広島・福岡・熊本などを歴訪し、視察を行った。東京では前首相桂太郎・首相山本権兵衛・大隈重信ら各界の名士とも面会し、各地では歓迎会が開かれた。

三月六日に東京を発った孫文一行は横浜に向かい、同地で一泊、汽艇に乗り横須賀に上陸したのは翌七日午前のことだった。横須賀鎮守府からは人力車で海軍砲術学校に至り、校長の案内で校内を参観、鎮守府にもどって昼食をとった後、海軍工廠を視察するというスケジュールだった。加藤の案内により工場や軍港内の戦艦香取・巡洋艦比叡・駆逐艦山風などを見学した。前年一一月に進水した比叡（後に戦艦）はまだ艤装中であり、竣工は翌年八月のことである。

この記念写真が撮影された時、孫文は四六歳、加藤定吉は五一歳だった。ちなみに、写真の前列中央に腰かけている横須賀鎮守府司令長官・海軍中将山田彦八は薩摩藩の出身で、大久保利通の甥（利通の妹の子）にあたる。海軍工廠は鎮守府の管下にあった。また、前列右から三人目、戴天仇（一八九一～一九四九）は日本留学経験もある知日派で、孫文の秘書として随行し、滞日時は通訳をつとめた。日本人随行員の山田純三郎は弘前出身の大陸浪人、島田経一は博多出身で玄洋社社員。吉田増次郎（後に海軍中将）は静岡移住旧幕臣の子で、静岡中学校から海軍兵学校に進んだ人、妻は沼津兵学校教授から陸軍砲兵中佐になった間宮信行の長女だった。

孫文が視察を終え、横須賀駅から列車に乗り込んだのは午後五時近く。その日は大磯にある実業家高田慎蔵別荘に宿泊、翌八日には国府津で急行列車に乗り換え、西へ向かって出発した（以上、孫文訪日時の動向は新聞各紙による）。

この頃、まだ孫文は日本との連帯に期待するところが大きかった。しかし、対華二十一か条の要求を突き付けるなど（一九一五年）、日本が中国に対して露骨な強硬姿勢をとるようになるのはすぐだった。

孫文は、この訪日からわずか数か月後、独裁者となった臨時大総統袁世凱を打倒すべく立ち上がった第二革命に失敗し、八月には亡命者として再び日本の土を踏むこととなる。戴天仇も同じで、大正五年（一九一六）に離日するまで日本で孫文と行動をともにした。

第一次世界大戦での対ドイツ参戦により、加藤定吉が第二艦隊司令長官として膠州湾封鎖などで戦功をたてたのは大正三年（一九一四）であり、男爵を授けられたのは同五年、大将に昇ったのは同七年（一九一八）のことである。

（樋口雄彦）

横須賀鎮守府副官　海軍軍令部参謀
海軍大尉　竹中徳太郎　海軍大佐　吉田増次郎

横須賀鎮守府参謀　随行員
海軍少佐　一條実孝　山田純三郎

横須賀鎮守府副官　秘書
海軍中佐　鈴木氏正　戴天仇

横須賀鎮守府機関長　技師
海軍機関少将　入沢敏雄　馬君武

横須賀鎮守府参謀長　横須賀鎮守府司令長官
海軍少将　上村翁輔　海軍中将　山田彦八

横須賀鎮守府軍医長　孫文
海軍軍医総監　戸祭文造

横須賀鎮守府主計長　横須賀海軍工廠長
海軍主計総監　中台順吉　海軍中将　加藤定吉

横須賀鎮守府人事長　鉄道会計長
海軍大佐　吉川孝治　宋嘉樹

南京師団参謀長少将
随行員　島田経一　袁華選

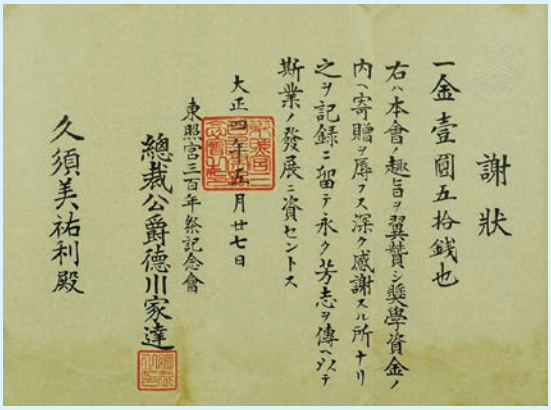
表紙写真人名対照

江原素六とその周辺 58

江原素六と東照宮三百年記念事業

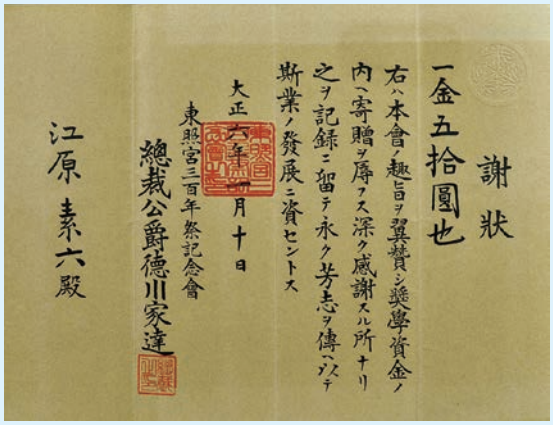
徳川家康が死去してから四百年を迎えた数年前、静岡県内では関連のイベントなどが開催された。大正四年（一九一五）は徳川家康没後三百年にあたっていたため、百年前にも同様の催しがあった。

日光東照宮宮司・日光町長ら栃木県側と、在京の旧幕臣平山成信・宮本小一らが主唱し、大正二年（一九一三）四月二三日、日光東照宮三百年祭奉斎会が結成された。総裁には皇室につながる侯爵小松輝久（北白川宮能久親王の子）を戴いたが、会長は伯爵林董（後に渋沢栄一）、副会長には平山成信・沢鑑之丞が就いたほか、顧問一二名の中には男爵山内長人・男爵赤松則良・宮本小一・江原素六、幹事八名の中には辰沢延次郎・植村澄三郎・赤松範一・佐々木慎思郎ら旧幕臣とその子弟の名士たちが名を連ねた。江原・赤松則良・佐々木は沼津兵学校の教職員・生徒の出身者であるが、特に江原は旧幕臣の親睦団体たる同方会の会長としての立場から委嘱されたらしい。


謝状
一金壹圓五拾錢也
右ハ本會ノ趣旨ヲ翼賛シ奨學資金ノ内ヘ寄贈ヲ辱フス深ク感謝スル所ナリ之ヲ記録ニ留テ永ク芳志ヲ傳ヘ以テ斯業ノ發展ニ資セントス
大正四年五月廿七日
東照宮三百年祭記念會
總裁公爵徳川家達
久須美祐利殿

東照宮三百年祭記念会の奨学資金寄付感謝状
（当館所蔵）

大正４年（1915）５月27日、久須美祐利あて。久須美は元沼津兵学校三等教授。


謝状
一金五拾圓也
右ハ本會ノ趣旨ヲ翼賛シ奨學資金ノ内ヘ寄贈ヲ辱フス深ク感謝スル所ナリ之ヲ記録ニ留テ永ク芳志ヲ傳ヘ以テ斯業ノ發展ニ資セントス
大正六年一月十日
東照宮三百年祭記念會
總裁公爵徳川家達
江原素六殿

東照宮三百年祭記念会の奨学資金寄付感謝状
（当館所蔵）

大正６年（1917）１月10日、江原素六あて。

日光東照宮三百年祭奉斎会は皇室から下賜金を下されたほか、徳川一族などの華族・実業家・一般などから寄付金、東京府・東京市などから補助金を集め、宝物陳列館・参拝者休憩所・防火設備を設置したほか、大正四年六月三日に日光東照宮で三百年記念大祭を挙行し、五年（一九一六）三月解散した（『渋沢栄一伝記資料』第四十一巻）。

奉斎会の結成から遅れること一年、大正三年（一九一四）七月には、東照宮三百年祭記念会という別組織が生まれた。記念祭で集まった金を、研究者に対する調査研究費や海外留学費の助成、賞品・賞金の贈与など、学術研究のために支出しようというのが目的だった。

記念会の総裁は徳川宗家の当主である公爵徳川家達、事務所も東京千駄ヶ谷の徳川邸に置かれた。副会長・評議員らには徳川・松平一門や元譜代藩の当主たちが名前を並べたほか、石渡敏一・岡野敬次郎・加藤弘之・成田勝郎・村田惇・山内長人・益田孝・榎本武憲・三田佶・菊池大麓・宮原二郎・箕作元八・渋沢栄一・平山成信・山口勝・三輪修三・神保小虎・平山信ら旧幕臣の官僚・学者・軍人・実業家らも加わった。江原素六も評議員の一人となっており、監事も兼ねた。右に名を挙げたうち、江原のほか村田惇（陸軍中将）・三田佶（日本銀行監事）・山口勝（陸軍中将）が沼津兵学校・同附属小学校の生徒出身者であり、神保小虎（理学博士）と平山信（同前）は父兄を沼津兵学校関係者とする。

東照宮三百年祭記念会は大正一五年（一九二六）には財団法人となり、昭和期まで存続した（『渋沢栄一伝記資料』第四十七巻）。江原が残した資料の中には、断片的なものではあるが、謄写版で印刷された同会の会議開催通知や学術研究費補助の推薦に関わる書類などがある。

（樋口雄彦）

史料館イベント報告

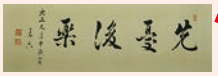
ギャラリートーク2020

今年度から、毎月第２土曜日の11：00から30分程度、館職員によるギャラリートークを開催することにしました。月ごとにテーマを変え、学芸員や職員が観覧者の皆さんとお話しながら展示解説をします。誰が何を話すかは当館のホームページでお知らせしています。ちなみに11月は、「一本の徳利から…」と題して、当館の館長が話します。さてどんなトークが展開しますか、お楽しみに！

＊参加には観覧料と事前申込が必要です。（先着８人）
ホームページでご確認ください。

《９月 のギャラリートークの様子 》

「江原邸一偉人の生活空間をかざるもの一」と題して、当館職員の鈴木百合子が、江原邸に飾られた書作について解説しました。参加者は普段立ち入り禁止の邸内に座布団を敷いて座り、大学で書道を専攻していた職員ならではの専門知識を聞きました。



江原素六書「先憂後楽」

このような扁額を見たことがあるかと思いますが、これは右から左方向への横書きの書ではなく、一行一文字の縦書きの書なのだということです。

平和を考える戦争史跡めぐり

8月10日（月・祝）
13日（木）

今年はコロナウイルス感染拡大防止のため、参加人数を各回親子２人５組限定で開催しました。

▲ 足高の拓南神社

高校生のための１日学芸員体験講座

8月1日（土）

午前は学芸員の仕事についての講義、バックヤードの見学。午後は資料の取扱い方の実習をしました。資料の梱包は、普段の生活にも役立つと好評でした。

▲ 茶碗箱の紐の縛り方実践中

博物館実習

8月20日（木）～
9月3日（木）

今年は、４名の大学生が実習をしました。新型コロナウイルスの感染防止対策をとりながらの実習でしたが、例年通り「ぬましんストリートギャラリー」での展示をメインに実施することができました。

今年の実習生▶
ぬましんストリートギャラリー前で

このようなパネルを製作中

夜のギャラリーライトの当て方も勉強の一部です！▼

◀ 第 17 回館蔵資料展チラシ

☆チラシ製作・写真提供
しんきん地域街づくり文化・芸術プロデュース
デザイン・企画　都築　透 氏

現場に来て気付くことが沢山！パネルの水平を取ったり、全体のバランスをみたり…、館外展示の難しさも実感しました。▶

▶石碑の写真撮影

スマホでの撮影には慣れていても、一眼レフカメラでの撮影は一筋縄ではいかず悪戦苦闘！。

沼津市明治史料館通信
第143号
令和２年10月25日
編集・発行　沼津市明治史料館
〒410-0051 沼津市西熊堂372-1
TEL 055－923－3335
FAX 055－925－3018
印刷　みどり美術印刷株式会社

国勢調査の先唱者 杉亨二胸像特別公開

今年は、国勢調査が初めて実施されてから100年になります。国勢調査と沼津が深く関わっていることをご存じの方は少ないのではないでしょうか。実は国勢調査の原形ともいえる、我が国初の近代的な戸口調査（駿河国人別調）を実施し、「沼津政表」「原政表」を残した人物が、後に沼津兵学校で教授を務めた杉亨二でした。当館では杉の長女春子（東京工業大学創始者で旧沼津藩士手島精一の妻）が親族に配るため作った胸像の一つを所蔵しています。国勢調査実施100年の記念すべき年に、実施を願いながら3年前に亡くなった杉へ思いを寄せ、沼津郷土史研究談話会の呼びかけで、胸像の特別公開をしました。（9月15日～10月18日）

杉亨二胸像